



同志社女子大学栄光館前庭のカタルパ

# キャンパスの樹木

| collection 1 |

## カタルパ

校祖新島襄は植物好きで、国内外の友人から種子や苗木を入手したり、あるいは逆に送ったりしたことが知られている。「カタルパ（ノウゼンカズラ科キササゲ属、和名・アメリカキササゲ）」（北アメリカ東南部に分布する落葉高木）もその一つであった。かつて大学の今出川校庭にはカタルパがあったが、最初にそれに着目したのは工学部教授であった故末光力作名誉教授で、先生はそれが新島先生お手植えのものではなかったかと推測している。おそらく明治10年代の初めの頃であろう。また田島繁元同志社中学校教諭によると、その位置は最初、現在の大学図書館（かつての聚芳館）横（後に彰栄館南前庭に移植）であったが、戦後1960年代に枯れてしまったという。その後中国産のキササゲが植えられたが、新島先生ゆかりのアメリカ原産のものは久しく今出川校地から絶えていた。と

ころが嬉しいことに、同志社女子大学名誉教授秦芳江先生は2010年7月女子大学の今出川校庭2か所に新島先生ゆかりのカタルパを植樹、寄贈されている。秦先生は、これに先立つ1991年秋にもご努力の末熊本市の「徳富記念園」から苗木を入手、女子大学京田辺校地の「新島記念講堂」前に植樹されている。この方は毎年5月末にはかすかな芳香を漂わせて白い清楚な花を咲かせている。

秦先生が今出川校庭に植樹されたカタルパの木の説明プレートには、「新島襄が種子を米国から持ち帰り、徳富蘇峰・蘆花兄弟に渡したといわれる花木」とある。新島先生はアメリカ留学から帰国の際に持ち帰ったと思われるが、さらに1880（明治13）年にはアメリカの知人であるE・E・バーニーに頼んで栽培マニユアルと種子を入手している。このことからカタルパは新島

先生にとって特別に思い入れの強いものであったことがわかる。苦節10年に及んだ先生のアメリカ留学時代、初夏に咲くこの花を見て日本の花々を思い出し、さらには両親や友人を偲んだのであろうか。そして帰国後、この木を同志社の校庭に植えることにより物心ともに大きな援助を受けた多くのアメリカの恩人、友人を忘れないようにしたのであろうか。もしそうだとしたら、カタルパは同志社とアメリカを結ぶうるわしい親善友好の絆とも言えるであろう。

新島先生はカタルパの種を九州伝道の時に知人に配ったとも言いつし、また熊本で大江義塾を営み奮闘する愛弟子徳富蘇峰を励ますためにも送った。幸いにも新島先生が送った種は、今や義塾の跡にできた「徳富記念園」で2世と3世が大木に育ち、毎年5月に咲き誇っている。その時期には多くの熊本

市民が見物に訪れるという。またカタルパの木は九州各地に少しずつ広がっているという。その意味ではカタルパは新島先生と蘇峰の師弟愛を伝えるのみでなく、同志社と熊本さらに九州の人びととの出会いを用意しているのである。まさに末光力作先生が言ったように、「樹木は人と人との出会いの象徴」なのである。

現在、同志社小学校校庭にも「徳富記念園」から譲られたカタルパがある。私は同志社のすべての諸学校に新島先生ゆかりのカタルパの木が植樹され、同志社の生徒と学生がこの木を見て新島先生とアメリカとの関係、同志社と熊本との関係について、学び契機になってほしいと願っている。

(元大学社会学部教授 宇治郷毅<sup>うじこうたけ</sup>)

(参考文献：末光力作「新島襄先生と植物」『新島研究』72号(1988年、

末光力作「田辺キャンパスと植樹」『同志社時報』800号(1990年、秦芳江「新島ゆかりのカタルパが咲いた」『新島研究』93号(2002年、田島繁「キサゲ」『同志社時報』113号(2002年、「熊本 同志社とのきずな」『Wild Rover(ワイルドローバー)』15巻(1999年2月、「新島ゆかりのカタルパを植樹」『The Doshisha Times』695号、(2014年1月)